

学習臨床的アプローチによる学びを促す教師のかかわりに関する研究

上越教育大学大学院 学校教育研究科（修士課程）

学校教育専攻 学習臨床コース（学習過程臨床分野）

金崎 鉄也

1 研究の背景と目的

教育改革が叫ばれて久しい。いじめや不登校や学級崩壊といった学校教育の問題点からは子どもたちの学校での学びそのものを根底から問い直す必要が迫られている。また、学習の不成立や指導力不足の教員の問題が教育問題として大きく報じられるようになった。そのため、教員の実践的指導力や専門性の向上が求められているところである。

また、自ら学ぶ力の育成や学力の低下が叫ばれる中でさまざまな教育改革への提言もなされている。しかし、現実の教室の学びが変わらなくては何も変わっていかないだろう。その鍵をにぎっているのは、一人ひとりの教師であり、それぞれの学校の教育実践である。

そこで、本研究は学習臨床的アプローチとして、教室の実際の場面を多岐にわたって分析し、子どもの学びの意味を問い直し、どのような教師のかかわりによって教室に学びに向かう雰囲気がつくれ、学びを構築できるのかを明らかにすることを目的とする。

2 研究の方法

1) 調査対象について

・調査（2002年5月～6月）複数の学校の複数の教室を参観し、学びの雰囲気を調査した。

・調査（2002年6月～9月）調査のなかで、教室の雰囲気がもっともよいと判断した教室を継続的に参与観察し、教師のかかわりを分析した。

・調査（2002年9月～12月）総合的な学習の時間で異学年のテーマ学習を実施する小学校を参与観

察し、自らすすめる学びの様相と教師のかかわりについて分析し、考察した。

・調査（2003年5月～6月）筆者の授業実践VTRから、長期的なかかわりと短期的なかかわりによる教室の学びの雰囲気の変化を共同分析することによって、教師のかかわりの作用と教師の実践力について考察した。

・調査（2003年6月～8月）筆者の教科の授業と家庭学習をつなぐノート指導の実践から、児童の学習ノートの1年間～2年間の変容を分析し、教科の学習における教師の長期的なかかわりと教科における子どもの学びについて考察した。

2) 調査方法について

調査～は授業場面をVTRなどで記録し分析した。調査はVTRとICRに記録し、事後のアンケート調査を児童と教師に行った。調査は、記録してあったVTRを複数で視聴して共同分析した。調査は保存してあったおよそ100冊のノートを分析し、現在成人しているノートの作者に追跡調査・面接調査を行って考察した。

3 研究の結果と考察

1) 調査（複数の教室の比較）

一斉指導場面で、教室の学びの雰囲気レベルを検討した。その結果を特徴的な3つの教室で比較した。学びに向けた雰囲気を育てている教室の教師は、担任当初から子どもたちとの呼応関係を育てるための工夫を行ってきたといい、その結果が他の教室との雰囲気の違いにつながったと推測された。

また、騒然とした雰囲気で一斉授業が成り立たないような教室の担任教師は、その状況に改善の意志を持っていなかった。このことから、学習者の学びの状況をとらえ、よりよく現状を更新していこうとする教師の姿勢の重要性が指摘される。

2) 調査 (優れた教師のかかわり)

優れた教師のかかわりを、機能的な発話分析を中心に他の二人の教師と比較した結果、

- ・「学ぶ意義、目標・課題の明確な提示」
- ・「共有化と合意形成」
- ・「個と集団への同時対応」

などによって、教室に学びの雰囲気を育てていることが明らかになった。教室空間が対話的關係になっており、子どもたちの意思を反映しながら学習をすすめている。また、一人の発言を受けながら全体に対して目を配り、個と全体に同時対応している。そして、周辺との交流を促し、学びを教室全体のものとしている。

3) 調査 (テーマ学習)

子どもたちが自らすすめるテーマ学習では、学習の成立が困難な子どもたちにあっても次への学習機会への強い意欲を持つことが明らかになった。自ら学ぶ子どもたちの非目的活動は未知なる学びへの困難性の現れであり、それを乗り越えることで“学びがい”と呼べる次への期待とよりよくしようとする希望を持つ。また、自らすすめる学びは、日ごろの学習でやる気や自他を見直したりする内面の学びの充実感が影響していることが明らかになった。また、子ども間の相互交流を促す対話的關係によって、共有化を図る教師のかかわりが学び合いの学習活動を促す結果となった。さらに、学習者主体の活動では異学年学習が最も目的活動の割合が高くなることが明らかになった。これは互いの違いに配慮し、学びに向けた仲間として共同学習が促されるからであると考えられる。

4) 調査 (実践例; 授業場面から)

1 時間の中にも学びを促す教師のかかわりがあり、その積み重ねが学級集団を学びに向けて変容させていく。その教師のかかわりは、一人ひとりに目を配り、学びの状況を把握し、学ぶ意義や学ぶ意味を伝える対話力や関係対応力などによって学びを促していると考えられる。

5) 調査 (実践例; ノート指導から)

授業で問いを探究する共同学習は、自ら問いを生んで自ら学んでいくノート学習につながった。与えられたものやっていた学習から自分で考えてやる学習に変わることによって、“学習とは自分がやっていくもの”という認識に至り、教科の学習においても自ら学ぶということを実現できるといえよう。

4 総括的考察

学ぶ雰囲気が形成されている教室には、教師と学習者、学習者間の相互作用によって、教室に学びが構築されている。現状をさらによくしていこうとする更新性が教室を向上的に変えていく。また、放任的になりがちな総合的な学習の時間における自ら学ぶ学習においても、普段の教室での学習の充実感が意欲を高め、事前事後の教師の対話的な相互交流を促すかかわりが学びの展開に影響していく。また、自ら学ぶ体験が学びがいにつながり、学ぶ意欲を育てていく。そして、問いを生む探究的な共同学習が、教科の学習においても自ら学ぶ態度を育てるであろう。

5 今後の課題と展望

子どもの学びとともに築く教師のかかわりの過程をさらに明らかにし、教師の実践的指導力の考察を深めていきたい。今後、自ら学び、学び合う教育実践の創造が求められていくであろう。そして、そこにかかわる教師の職能発達が望まれる。

指導 戸北凱惟